

キェルケゴールの書簡*1

——その 3——

訳：谷塚 巖

書簡212 (T125)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ

日付なし (1844年)

私の善良なるレヴィン！

*1 以下の書簡の翻訳は、前号の続きであり、「キェルケゴール読書会（関西）」（<https://kierkegaard.jp/> 研究会）で読み合わせた書簡を原稿化したものである。翻訳の底本には、批判的校訂版『キェルケゴール全集』（1997-2013）のオンライン版を用いた。Søren Kierkegaards Skrifter, bd. 1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, Søren Kierkegaard Forskningscenteret og Gads Forlag, København, 1997-2013. (<http://SKS.dk/forside/indhold.asp>) 書簡の分類番号は、校訂版全集に収録されているものに準じた。括弧内の T で始まる分類番号は、N・トゥルストロブ編『セーレン・キェルケゴールに関する手紙と文書』（Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard, udgivne paa Foranledning af Søren Kierkegaard Selskabet ved Niels Thulstrup, bd. I, Kbh. 1953）による。校訂版全集からの出典箇所は、各書簡の末尾の括弧内に、全集の略記号 SKS、巻数、頁数の順に示した。なお、翻訳の際に参照した校訂版全集の注釈は、各脚注の末尾の括弧内に、オンライン版の URL を記載することでその出典を示すことにした。デンマーク語の語彙については、次の各辞典を参照した。Herman Vinterberg & C. A. Bodelsen, *Dansk-Engelsk Ordbog*, 3. udgave, 3. oplag, ved Viggo Hjørnager Pedersen, Gyldendal, 1966, 1990; Christian Molbech, *Dansk Ordbog indeholdende det danske Sprogs Stammeord tilligemed afledede af sammensatte Ord, efter den nuværende Sprogbrug forklarede i deres forskiellige Betydninger, og ved Talemaader og Exempler oplyste, Anden forøgede og forbedrede Udgave*, Kiøbenhavn, 1859; Ludvig Meyer, *Fremmedordbog eller Kortfattet Lexikon over fremmede, i det danske Skrift- og Omgangs-Sprog forekommende Ord, Kunstudtryk og Talemaader, tilligemed de i danske Skrifter meest brugelige fremmede Ordforkortelser*, Tredje, forøgede og forbedrede Udgave ved F. P. Dahl, Kiøbenhavn, 1853.

月曜日

どうか、もしあなたが可能であれば、今日の午前11時半に、私の部屋まで来てくださいませんか。あなたは、この数日、空いていますよね。というのも、あなたが協会全体と些細な事柄で言い争っていることは*2、いかなる活動とも見なされないからです。

友情を込めて

S・キェルケゴール

(SKS 28, 334)

書簡217 (T126)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ

日付なし (1845年5月から6月)

拝啓！

あなたは、この街にいますか、あるいは、田舎に出かけてしまいましたか？ 来週までに、一度、あなたとお話したいと思っていました。その時までこの街にいますか？ もしいるのであれば、本日、数時間のうちに、より詳細な知らせをあなたは受け取るでしょう。しかし、いかなる場合であっても、あなたの夏休暇の計画を、私のゆえにわずかでも変更するようなことがあってはなりません。

敬具

S・K

*2 当時、イスラエル・レヴィン (Israel Salomon Levin, 1810-83) が、クリスチャン・モルベッヒ (Christian Molbech, 1783-1857) やホルベア協会 (1841年創立) の会員たちと論争の渦中にあったことが、ここで言及されている。レヴィンは、コペンハーゲン大学を出てから (博士候補)、文献学者としての仕事に従事し、新聞各紙の編集を行っていた。また1844年から51年までの間、キェルケゴールの秘書も務め、『人生行路の諸段階』(1845)にも深く関わったとされる。(http://www.sks.dk/b208/kom.xml#k2826)

宛先

博士候補 I・レヴィン殿

(SKS 28, 337)

書簡215 (T127)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ

日付なし (1845年3月から4月)

善良なるレヴィン!

急がなければなりません——

私はここに、ご迷惑に対する私の謝辞をこの手紙に同封し*3、さらに、労働と時間に対する報酬*4をこの謝辞に同封して*5、同時に、あなたにお送りします。

注記。筆跡を永続化させるあらゆる試みは、固くお断りします*6。

敬具

S・キェルケゴール

宛先

博士候補 レヴィン殿

*3 “indesluttet i dette Brev” デンマーク語の動詞 at indeslutte には、「外部から隠す・隔離する」や「取り囲む」、「閉じ込める」などの意味がある。

*4 『人生行路の諸段階』の校閲作業に対する謝礼と推定されている。(http://www.sks.dk/b208/kom.xml#k3179)

*5 “indesluttet i Taksigelsen” 字義通りに訳せば、「この謝辞に同封して」となる。

*6 当時、レヴィンが出版の準備をしていた、筆記体の練習帳への協力依頼に対する返事。なお、キェルケゴールが、この練習帳に協力することに乗り気でなかった点については、前号の書簡 213 (T123) を参照。『新キェルケゴール研究』第 19 号、キェルケゴール協会、2021 年 5 月、45-46 頁。

みずからの手によって*7

(SKS 28, 336)

書簡218 (T128)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ

日付なし (1846年1月から2月)

拝啓！

明日あなたがお見えになっても、無駄になるでしょう。そこで、あなたを取りやめるといえるのはいかがですか？ そうすれば、私のせいにはならなくなりますね。とはいえ、次の土曜日の10時半に、敢えてお願いできないでしょうか。

敬具

S・キェルケゴール

宛先

I・レヴィン殿

(SKS 28, 338)

書簡219 (T129)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ

日付なし (1846年1月から2月)

拝啓！

本日 (月曜日)、修正されたものを一つも受け取りませんでした*8。そういうわ

*7 この書簡が、キェルケゴールによって直接届けられたことが示されている。

*8 注釈では、キェルケゴールがここで言及しているのは、1846年1月から2月上旬

けで、明日（火曜日）の3時15分に。

敬具
S・K

宛先
I・レヴィン殿

(SKS 28, 338)

書簡220 (T130)

キェルケゴールからイスラエル・レヴィンへ
日付なし (1846年1月から2月)

火曜日——午前

拜啓！

人々は印刷所で待ちます。私はこの印刷所で立っています——そして待ちます。私はここから出歩きつつ待ちます——そしてあなたが急いでくれることを期待します。あなたの美文家的な注意深さによる急ぎを、私は恐れていません。

そういうわけで、急がなければならないのです。私にとっては、一日一日が、高くつくのです。

敬具
S・キェルケゴール

宛先
博士候補 I・レヴィン殿

(SKS 28, 339)

書簡211 (T131)

キェルケゴールからギョヴァズへ
未送付・日付なし (1853-55年)

親愛なるギョヴァズ！

あなたは、もしかするとご自身で、それがどれほど困難であるかを感じ取っているかもしれません。すなわち、あなたと私のように、二人がある程度まで公の人間であるときに*⁹、さらに、そのような公の人間として、私とあなたとで、これほどまでに意見が合わないときに、私的な関係を保つことがどれほど困難であるかを*¹⁰。

もちろん、たとえ私が『祖国』紙について一つひとつ判断を下すことを差し控えようとしても——私は喜んでそうするはずなのですが——、そうすることは私にはできません。というのも、この新聞は、まさに私の著述家としての活動とも関係しているからです*¹¹。そして、このことに関しては、『祖国』が、この活動を無責任に取り扱ったというのが、私の判断です。ただし、私はそのことに関して、より詳細に発言したいと望んでいます。

そういうわけで、私がこれまであなたと共有してきた関係を断つことを許してください。すなわち、私があなたのところに向向っていたのは*¹²、週日のうちのある特定の曜日であったという意味においてです*¹³。私はただ、自分の自

*⁹ 『祖国』紙の編集者としてのギョヴァズと、著述家としてのキェルケゴールのことが言われている。(http://www.sks.dk/b208/kom.xml#k2856)

*¹⁰ ギョヴァズは、キェルケゴールの親友の一人で、『祖国』紙の編集者。『あれか - これか』の校閲を担当したこともあった。1849年の日記NB9:28で、キェルケゴールは「ギョヴァズは私の親友である」と述べている。SKS 21, 214。しかし、それから数年後、両者の関係が冷え込んでいったことが示唆されている。なお、書簡209 (T111) も参照。『新キェルケゴール研究』第18号、キェルケゴール協会、2020年、26-27頁。

*¹¹ キェルケゴールは、仮名や実名で、『祖国』紙にたびたび寄稿していた。

*¹² 当時、『祖国』紙の編集室は、クマーゲーゼ54番に置かれていたという。(http://www.sks.dk/b208/kom.xml#k2864)

*¹³ キェルケゴールが、『祖国』紙の編集室を定期的に訪ねていたことが示唆されていることから、ここでは、ギョヴァズとの職務上の公的な関係を切ることが伝えら

由を望んでいるだけです。私があなたとお会いすることになるかは神がご存知です。

どうか、あたかもこのことによって、私の著述家としての活動をめぐって、『祖国』紙に、公式の見解を表明させようとしているかのように、あるいは、同じような類のことに影響を及ぼそうとしているかのように、あるいは、表明されうる見解をめぐって、私がどういう判断を下そうとしているのかを、あらかじめあなたに理解させようとしているかのように、誤解しないでください。

しかしまたこのことを、親愛なるギョヴァズ、あたかも、あなたが私に対して恩顧を示してくれたことを私が少しでも忘れたかのように、あるいは、どんなことがあっても、あなたに対して誠実に守ってきた献身を忘れたかのように、誤解しないでください。この献身は、私が——もしあなたが許してくれるのであればと言いかけたのですが、私はそうは言いたくありません。そうではなく、私はこう言いましょう。この献身は——あなたがそれを許そうが許すまいが——私があなたに対して守るつもりでいるものであると*14。

あなたの

S・K

(SKS 28, 333)

書簡163 (T132)

キェルケゴールからフレデリク・クリスチャン・シバーンへ

日付なし (1846年)

閣下！

れていると考えられる。

*14 キェルケゴールの臨終の床で取り交わされたエミール・ボエセンとの会話の中で、キェルケゴールは、ギョヴァズが「私的には」自分を厚遇してくれたが、「公的には」冷遇されたということを述べたとされる。Bruce H. Kirmmse, *Søren Kierkegaard truffet: Et liv set af hans samtidige*, C. A. Reitzels Forlag, København, 1996, S. 178.

ほとんど忘れるところでした。そのことを記憶していなかったことに、私は今、苛立ちさえ覚えております。というのも、数日前に、私が出版した本の一部を閣下にお送りしたからです*15。この書名の本を書くことは、私の喜びでした。そして、仮名諸著作を書くという私の取り組みが*16、結びとしてのあとがきによって、シバーンが学部長の時代に（ローマの人々もまさにこのように言いました——キェロが執政官の時代にと）、ちょうどなし遂げられたことを嬉しく思っております。

ともあれ、用件に移ります。というのも、実際に用件があるからです。ブリッヒャーという名の老父がおります*17。彼は空いている用務員の仕事*18を探しています。これが用件です。私の所望は、今回、閣下が、もしないうのであれば、それにふさわしい生けるご関心を、彼のために示していただければということです。もし、私の思い違いでなければ、前回、現職のヴァルデマール・ミュラーに仕事が決まったのは、まさに閣下のお取り計らいによるものでした。今回は、ブリッヒャーの番にしてください。彼は、まだ力があるのですが、年をとってしまい、人生において多くの苦労を重ねてきた人なのです。そうでなければ決して推薦に関わらない私が、この件では厚遇していただけるという状況が、閣下のご注意を、可能なかぎり、彼に引きつけることに貢献するようにしてください。

* 15 ここでは、1846年2月27日に出版されたヨハネス・クリマクス著『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』——以下、『あとがき』と略記——のことが言われている。

* 16 次の一連の仮名著作のことが言われている。ウイクトル・エレミタ編『あれか・これか』（1843）、コンスタン・コンスタンティウス著『反復』（1843）、ヨハネス・デ・シレンティオ著『おそれとおのき』（1843）、ヨハネス・クリマクス著、キェルケゴール編『哲学的断片』（1844）、ウイギリウス・ハウフニエンシス著『不安の概念』（1844）、製本家ヒラリウス編『人生行路の諸段階』（1845）、ヨハネス・クリマクス著『あとがき』（1846）。(<http://www.sks.dk/b161/kom.xml#k2606>)

* 17 注釈によれば、キェルケゴールが推薦しているのは、ペーダー・ブリッヒャー（Peder Blicher, 1784-1864）であるとのこと。キェルケゴールの兄ペーターの妻であるイエッテの叔父にあたる人物。コペンハーゲン大学を出た後、フエン島やシェラン島の各地で庭園管理の職に就いていたという。(<http://www.sks.dk/b161/kom.xml#k2609>)

* 18 “den ledige Pedelpost” コペンハーゲン大学での用務員の職のことを指す。(<http://www.sks.dk/b161/kom.xml#k2610>)

あなたの恭順なる下僕

S・キェルケゴール

宛先

閣下

シバーン学部長殿

(SKS 28, 270-271)

書簡16 (T133)

キェルケゴールからペーター・クリスチャン・キェルケゴールへ

1846年3月19日

親愛なる兄^{*19}へ！

お手紙^{*20}ありがとうございます。僕にとってそれは心に沁みるものでした。あの大きな『結びとしての本』^{*21}のことは気にしないでください。どうぞ読んでください、あるいは、読まないでください。両者のどれをとっても、お兄さんは後悔することでしょう。しかしいずれにしても、僕は、だれに対しても読むことを強制しないという純粋な良心を持っています。少なくとも、友情の証しとして、無料の一部をお送りしたお兄さんに対しては。お兄さんはご存知でしょう。僕がほぼ一日中、実存弁証法の中で勤しむよりほかのことはしていないということを。そしてこのことから、お兄さんは、僕の数々の創作活動そのものに関連して、僕が、ある一人の勤勉な弁証法家^{*22}と関わるのに、実際、

^{*19} キェルケゴールの長兄 (Peter Christian Kierkegaard, 1805-88)。

^{*20} この書簡は、注釈によれば、1846年3月16日付で兄から郵送されたものであると推定されている。キェルケゴールは、兄に『あとがき』を送っており、ここで言及されている兄からの書簡は、そのお礼のための返事と見られている。(http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k348)

^{*21} 1846年2月27日に出版されたヨハネス・クリマクス著『あとがき』のことを指す。

^{*22} “en dygtig Dialektiker” 実在の人物が推定されるべきであるとするならば、へー

どれだけ気が進まないでいるかを察してください。なぜなら、僕は、僕たちが共通の出発点を獲得するより前に、彼と関わるのがあまりにも長引くのではないかと恐れているからです。このようにして僕は、今となつては、著述家であった、あるいは「仮名たちがそれになることに協力的」*²³であったすべての時間を過ごしてきたので*²⁴、一度も、僕が何をするつもりでいるのかについて、すなわち職務*²⁵について、どの人間にも話してこなかったのです。僕の沈黙の原則は、神中心的な19世紀の耐えがたい駄弁の上に掲げられたエピクラムとして、常にその意味を保持していますが、僕は、たった一つの言葉で——もしその言葉が僕の原則に、かろうじて、触れないのであれば——退けることのできるような、数々の最も相違した意見に、静かに、耳を傾けてきました。そのようにして生きること*²⁶は、高級な遊びであり、恐ろしいほど、緊張を強いるものであることを、僕はよくわかっています。以前からそのことはわかっていましたし、経験からもそのことはわかっています。このこと*²⁷が成功して、僕はますます神に感謝を捧げるばかりです。それにしても想像してみてください。僕はこうして、いまや5年目に入りますが、中絶することなく、永遠に続くかのような一日を、毎日、同じ一つの、一年毎に増し加えられていく制作活動の緊張の中にいることに耐えることができたのです。そしてそれにもかかわらず、僕は今でも、存在*²⁸への、人間への、自然における最も些細な対象への老いた喜びをもっているのです。ですから、お金をいくらか使うこ

ゲル主義の神学者マーテンセン（Hans Lassen Martensen, 1808-1884）の名前が挙げられる。しかしこの書簡からだけでは確定できない。

*²³ 『あとがき』には、「最初にして最後の言明」というキェルケゴール自身の実名の署名が入った文書が付録として最後に収録されているが、引用はその文書から行われている。SKS 7, 569-573.

*²⁴ 1842年の『あれかーこれか』の執筆から1846年の『あとがき』までの一連の著述活動のことを指す。（<http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k355>）

*²⁵ “Præstation” 字義通りにとれば、「産出」、「実演」、「支払い」、「返済」、「貢献」などと訳されるが、文脈を考慮して、ここでは「職務」と訳しておく。

*²⁶ “Existere” 前述の「沈黙の原則」を貫いて著述家として生きることであると考えられるので、ここでは「生きること」と訳しておく。

*²⁷ これまでの一連の著述活動のことを指して言われている。

*²⁸ “Tilværelse” デンマーク語の at være til 「存在すること」という動詞の名詞形。必ずしも人間に限定して用いられる語ではない。

とだけは許してください*²⁹。彼らには、ただ風刺画を描かせておけばよいのです。ただ私を嘲笑させておけばよいのです*³⁰。だれがそうしようと、僕は、自分に許されている善なるもののために何度も何度も、感謝しているほど、どのような憤慨からもかけ離れています。しかし、僕が何をするか、あるいはするつもりでいるかを話すこと、これは僕にはできません。僕はとても注意深いので、最近またも、ある一つの例を経験したぐらいなのです。というのも、僕は数日のうちに、ある男から誤解されるであろうということを知っているからです。彼と最後に話した時に、今となっては彼の知るところとなっていることを、つまり彼と話したその時には、するつもりでいたことがあっただけでなく、すでに実行していたこともあったのですが、それがまだ出版されていなくても、そのあることを彼に話すことができたかもしれなかったからです*³¹。

ともあれ、このことについては十分でしょう。お兄さんのお考えを、この太陽の光る街*³²における僕の自己充足的な孤独の上で、少しの間、思いめぐらせたあとで、僕は、自分の考えを、そちらの、田舎の孤独*³³におけるお兄さんの幸福な家庭の上で、思いめぐらせることにしましょう。祈願*³⁴を完全なものにするために、イエツェとポールの手を煩わせたお兄さんの招待状に感謝しています。彼ら一人ひとりにも感謝して下さるようお願いいたします。イエツェには、僕が折にふれて彼女の事について考えていること、彼女が僕を訪ねてきてくれたときのことを、今も、感謝をもって思い出すこと、彼女に対して僕からお返しをしたいと思っていることを、確信させてあげてくださ

*²⁹ キェルケゴールは出版にかかる費用のすべてを自費で支払っていた。(http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k356)

*³⁰ いわゆる「コルサー事件」において、キェルケゴールの容貌を風刺する絵が、大衆紙『コルサー』に掲載され、嘲笑されたことを指して言われている。

*³¹ 「ある男」がどのような人物であり、そしてキェルケゴールが彼と何を話したのかについては、この書簡からだけでは不明である。注釈によれば、キェルケゴールは、1846年3月4日に『文学評論』の原稿を印刷所に入稿している。この書簡の日付は3月19日であり、『文学評論』は、3月30日に出版されている。(http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k3020)

*³² コペンハーゲンを指してこのように喩えられている。

*³³ ベーダースボウ (Pedersbog) を指す。シェラン島中部の街ソーウェー (Sorø) に隣接する。

*³⁴ “Besværgelse” 「呪文」や「お祓い」が原義であるが、ここでは「祈願」と訳しておく。

い。ポールには、セーアンという叔父を思い出すことに慣れるように勧められています。独り身にとって、夫婦の証明^{*35}に敬意を払うことがふさわしいように、僕が、軍隊^{*36}に敬意を払っているということを、お兄さんはおわかりでしょう。ところで、僕は今ちょうど、少しばかりの自由時間を得ていますので、もし可能であったならば、僕の魂のうちにある、一度でいいからお兄さんを訪ねたいという願望が、勝利を取めた数々の招きと一つになることによって、完全に僕を、文字通りの意味で、お兄さんの方へ駆って行かせたことでしょう。——もしそうであったならば、僕はそちらに向かっていたと思います。しかし、もし可能でなかったならば、今そうなのですが、そちらに向かいたいという願望、欲求、兄弟の思いやり、これはまさに、最善なるものでしょう。そちらに向かうことが半ば強制されているような、無気力で不機嫌な、等々の人間、これは、最善であるとはいえません。ですから、その最善なるものが、招待状のお招きを受けて、ただちに、この手紙によって送り返されるでしょう。それは、そちらへと、まっすぐに道を取り、僕がお手紙を受け取った同じ瞬間に向かっています。——僕自身はといえば、この肉体においては、行くかもしれませんし、行かないかもしれません。

お元気でいてください。お兄さんの教区での安全を楽しんでください。今や、すべての危険は去って行ったのですから^{*37}、唯一の変化といえるのは、築造された新しい住まいを、お兄さんが得たということではないでしょうか。お兄さんの家庭の幸福を存分に喜んでください。もし無と共に始めることが、学問上でさえ疑わしい事柄であるならば、可能なかぎり少しずつ始めることは、婚姻上ではその秩序にかなっているのではないのでしょうか。勝ち取られたものと、持つ者には与えられるべき^{*38}、勝ち取られた希望とによって今は喜んでい

* 35 “Demonstration” ここでは、直訳ではあるが、「証明」と訳しておく。

* 36 “Stridskræfter” 字義通りの意味は「戦闘力」、すなわち「軍隊」である。キェルケゴールは、ここで、兄の家族を「軍隊」に喩えているのである。

* 37 兄ペーターは、バプティスト派の両親の間に生まれた子どもたちに、強制的に洗礼を受けさせることに反対し、免職の瀬戸際に立たされていた。この点については、書簡 13 から書簡 15 (T116-T118) も参照。『新キェルケゴール研究』第 19 号、キェルケゴール協会、2021 年 5 月、36-41 頁。

* 38 マタイによる福音書 13 章 12 節参照。(http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k372)

ますが、そのためにこそ、お兄さんはイエッテの病^{*39}と共に始めたのです。彼女に、僕に代わって挨拶してください。僕たちの愛する甥であり、家族の存続者であるポールにも挨拶してください。お兄さん自身にも挨拶します。

あなたの弟より

宛先

神学博士 キェルケゴール殿

ペーダースボウ

前払

行先 ソーウェー

(SKS 28, 34-36)

書簡72 (T134)

キェルケゴールからヨハン・ルードヴィ・ハイベアへ

1846年3月29日

拝啓 教授殿！

1846年3月29日

少しご面倒をおかけすることをお許しください。先生は『日常物語』の著述家に関連して、出版者として人々を夢中にさせているお方です^{*40}。同封いたし

^{*39} イェッテの精神状態のことが言われている。(http://www.sks.dk/b1/kom.xml#k371)

^{*40} この書簡の宛先は、当時、劇作家として活動していたJ・L・ハイベア (Johan Ludvig Heiberg, 1791-1860) であるが、そのハイベアの名前で出版された『日常物語』の事実上の著者は、彼の母親であるトマシーネ・ユレンボウ (Thomasine Christine Gyllembourg-Ehrensward, 1773-1856) であった。(http://www.sks.dk/b70/kom.xml#k5014)

ました小さな本の一部*41を、彼に届けていただけないでしょうか*42。

先生がご覧になっている、お手元の手紙の前にある一部は、直接の受領者として、教授である先生ご自身に献呈いたします。私が執筆したこのような一部を先生にお送りすることは、私にとって心に沁み入ることであり、それゆえに、私にとって習慣となりうるようなことではありません。

敬具

S・キェルケゴール

宛先

ハイベア教授殿

宛先

ハイベア教授殿

デンマーク国旗の勲爵士

小包在中

(SKS 28, 128)

*41 ここで言及されているのは、ユレンボウの小説『二つの時代』を、キェルケゴールが書評した『文学評論』（1846）のことである。（<http://www.sks.dk/b70/kom.xml#k5017>）

*42 「彼に」とされているのは、『日常物語』や『二つの時代』の出版形態に従ってである。キェルケゴールは、実際の著者が誰であったのかわかっていた。（同上）